

詩人真壁仁と北朝鮮

西原大輔

一、詩人真壁仁について

詩人真壁仁（一九〇七～一九八四）は、戦後の東北を代表する文化人の一人である。「野の思想家」とも称され、一九八五（昭和六十）年に創設された「真壁仁・野の文化賞」は、山形県内在住者の出版物に贈られる歴史ある賞となっている。本論文は、この真壁仁と北朝鮮との関係について考察するものである。

明治末期に山形の自作農の家に生まれた真壁仁は、民衆詩派の詩人白鳥省吾（一八九〇～一九七三）や福田正夫（一八九三～一九五二）に傾倒し、ホイットマンの詩を読みふけた。また、上京して高村光太郎（一八八三～一九五六）を訪問し、生涯にわたって師と仰いだ。いわば、大正から昭和にかけての時代の、典型的な地方文学青年であった。一方真壁仁は、早くから社会意識に目覚めたことで、警察の監視対象となる。戦後は山形の風土に根差した活

動を展開し、冷害を克服するための稲作指導、黒川能の発掘など、農業・文化の分野で優れた業績を残した¹⁾。

真壁仁の影響力は、一地方にとどまらない。詩人として全国的に高い評価を得ており、代表作「峠」（一九五八年）は、一九六九（昭和四十四）年から、中学校国語教科書の定番教材として使われてきた。多くの日本人が知っているのは、教科書の名詩「峠」の作者としての真壁仁である。詩「峠」において、峠は人生の節目の象徴である。山を越えてゆく旅人は、峠を過ぎると、もうこちら側には戻ってくるできない。その決断と決別の思いが、詩の冒頭部分に託されている。

峠は決定をしいるところだ。

峠には訣別のためのあかるい憂愁がながれている。

峠路をのぼりつめたものは

のしかかってくる天碧てんびきに身をさらし
やがてそれを背にする³⁾。

中学校の生徒でも、「峠」を卒業や転居などの人生の大切な瞬間に重ね合わせることで、比較的容易に内容を理解することができる。詩は次のように結ばれる。

たとえ行手がきまっても
ひとはそこで

ひとつの世界にわかれねばならぬ。
そのおもいをうずめるため

たびびとはゆっくり小便をしたり

摘みくさをしたり

たばこをくゆらしたりして

見えるかぎりの風景を眼におさめる。

少年少女にもわかりやすい名詩である。高い理想を追求した真壁仁の思いが、峠の空間の高さと響き合っている。

二、真壁仁の北朝鮮招待旅行

真壁仁は、一九七二（昭和四十七）年に北朝鮮から特別な招待を

受けた。金日成（一九一二～一九九四）首相の還暦の祝賀行事に招かれたのである。一行は三月二十七日に羽田を発ち、モスクワ経由で平壤に入った¹⁾。

山形農民文学懇話会が発行する雑誌『地下水』第十四号に、真壁仁は詩「ペクトウの峰²⁾」を発表している。北朝鮮の政治宣伝に添った形で金日成を礼讃した、四十数行の「作品」である。詩人は、金日成を崇高なペクトウの峰（白頭山）に重ね合わせ、親愛の情をこめて「あなた」と呼びかけつつ、その生涯の業績を称賛してゆく。パルチザンとしての断固たる戦いや、工場や農村での慈愛に満ちた指導について語った後、詩の語り手は北朝鮮の独裁者の人格をこう褒めたたえる。「あなたの目はやさしくうるみ／あなたの口は勇氣と決断に結ばれる」。そして、詩「ペクトウの峰」の末尾は、次のように終っている。

白頭びやくとうの峰は雪にかがやき

清冽せいれつな白銀の眉を

三千里江山にめぐらしている

私は見る

あれがあなたの顔だ

深いひだとひろい裾野のひろがりによって高く

そしてきらめく精神の永遠の若さを

これが、教科書の名詩「峠」で全国の純真な中学生たちにその名を知られている、あの真壁仁の作品なのである。素朴な農民詩人の、思いもかけない一面である。もっとも、「峠」と「ベクトウの峰」の両詩には、文学作品としての共通点が見られる。どうやら真壁仁は、峠や峰のような、山の高い場所が好きなようだ。金日成の生き方に深く共感していた詩人が、朝鮮民族を象徴する「ベクトウの峰」を題材にしたのは、山や峠に崇高さを見るこの文学者の志向を反映したものと考えられる。

しかしながら、善良な山形の農民詩人真壁仁は、現地を訪れ、自らの眼でこの監獄のような国家を観察したにもかかわらず、どうしても冷静な判断を下すことができなかったのだろうか。なぜ北朝鮮のプロパガンダに容易に騙されてしまったのだろうか。

真壁仁は、共産国家の実態を理解した上で、確信犯的に北朝鮮を支持したわけではない。なるほど確かに、彼は親北朝鮮派ではあった。早くも一九六七（昭和四十二年）九月には、朝鮮民主主義人民共和国創建十九周年祝賀会に参加しており、一九七三年八月にも、わざわざ上京してマンステ芸術団の歓迎会に出席している。しかし詩人は、北朝鮮につながる組織の一員として活動して利益を得ていたわけではない。仮に真壁仁が北朝鮮の人権抑圧の実情を十分に知っていたとしたら、おそらく金日成を礼讃する詩など発表しなかったに違いない。彼は、北朝鮮の対日宣伝工作に欺かれ、独裁国

家にみごとに利用されている。冷徹な知性を欠いた素朴な善意や、貧しい者を無条件に善とする単純な正義感が、結果的に誤った判断をもたらしたと言えよう。無知であることの罪深さである。

北朝鮮招待旅行から帰国した真壁仁は、一九七二（昭和四十七年）五月二十二日から『山形新聞』に「チョソンの旅」という旅行記を連載している。その内容は、今となっては滑稽なくらい称賛一辺倒である。この詩人によれば、「共和国には警察というものがない。放火、盗み、詐偽、殺人などという犯罪はないし、非行、交通事故、火事もほとんどないということだから、新聞の社会面の記事はゼロなのだ」というのだ。

空港の町の婦人たちや小学生が長い列をつくって小花をはげしく振ってくれる。マンセイを叫んでいる女性たちの真剣な顔を見ると、お義理や形式で迎えているのでないことがわかる。ぼくらはこの国に滞在中、どこへ行っても連帯の熱気を電流のように吹きかける歓迎の波にもみくちゃにされた。

北朝鮮おなじみの、人民動員による大歓迎に、真壁仁はものみごとに欺かれている。無知であることの罪深さを、改めて思わずにはいられない。

三、北朝鮮礼讃本との比較

寺尾五郎という人物の書いた『三八度線の北』（新日本出版社、一九五九年）という本がある。北朝鮮礼讃本の代表格とされる一冊で、出版当時は非常に良く売れたようだ。北朝鮮の明るい未来展望を語ったこの書籍は、在日コリアンにも大きな影響を与えた。これを読んで北朝鮮への「帰国」を決めた者も少なくなかった。『三八度線の北』出版翌年の一九六〇（昭和三十五年）年、北朝鮮を訪問した関貴星^{（8）}は、列車の中で次のような場面を目撃している。

われわれ一行が清津^{（9）}にむかう車中のことであった。一行のメンバーである寺尾五郎氏が、三人ばかりの青年につかまり、激しい口調で抗議されているのを目撃した。青年たちの言い分を要約すると「僕たちはあなたの著書を読み、信用してこの国にやってきたんだ。北朝鮮の事情は、あなたが書いたのと全然反対ではないか。だまされて一生棒にふった僕たちをどうしてくれる……」というものであった^{（8）}。

興味深いことに、北朝鮮礼賛本『三八度線の北』と、詩人真壁仁の「チョソンの旅」を読み比べてみると、悪評紛々たる寺尾五郎の著作の方が、真壁仁の旅行記よりも、よほどともて客観的である。

二人の訪朝時期に十年以上の隔りがあるため、単純な比較はできないが、『三八度線の北』は、北朝鮮社会の遅れた面にも目を配っている。ホテルの質は低く、コップは歪んでおり、日用品はみなお粗末で、消費生活は貧しいと、率直に述べている^{（9）}。

北朝鮮に好意的な本として、他に日本人記者の訪朝レポート『北朝鮮の記録』（新読書社、一九六〇年）がある。読売、産経、毎日、共同通信の新聞記者たちによる十本の文章は、どれ一つとして、この独裁国家が未来に向かって力強く発展していくことを疑っていない。それでも、この国の遅れた実態にはきちんと目を向け、生活水準の低さや不衛生さに言及している。

これに対し真壁仁の紀行文「チョソンの旅」は、北朝鮮の宣伝を鵜呑みにし、そのプロパガンダを反復する拡声器と化している。「人民がキムイルソン首相を熱烈に慕っている」「いつも大衆の中に入る政治家^{（10）}」などと述べ、手放してこの独裁者を称賛している。紀行文の中には、疑念の片鱗すら見いだすことができない。いくら無知であったとは言え、真壁仁を北朝鮮に騙された純粋な被害者と見なすわけにはいかないだろう。彼の発表した詩や旅行記が、日本の言論界で一定の影響力を及ぼしたことは確かであり、詩人の素朴さや善意だけを評価するわけにはゆかない。

四、金日成礼讃本『万寿無疆』

『万寿無疆』(朝鮮画報社、一九七二年)と題された本がある。真赤な表紙には、「金日成首相の誕生六十周年を祝う」という金文字の副題が刻まれている。金日成を礼讃した日本文学者の短歌や詩を収めた一冊で、詩人真壁仁が訪朝したの同年の一九七二(昭和四十七)年に、上野の朝鮮画報社から出版された。編者は歌人の結城哀草果(一八九三〜一九七四)。真壁仁と同じく山形の人物で、齋藤茂吉(一八八二〜一九五三)に師事し、『アララギ』で活躍した。作品が収録されている歌人・詩人のうち、比較的名が知られているのは、歌人結城哀草果のほか、詩人江間章子(一九一三〜二〇〇五)、そして真壁仁の三人である。

世界平和の^{ため}六十年前昇りし太陽常若く今朝も輝く金日成首相
金日成首相の還暦よろこぶ歌合唱が世界の山河大きくゆずぶる
生涯に一度まみえて首相の人間電波まともに受けたく^い

これらは全て、結城哀草果の短歌である。「世界平和」という美しい言葉を独裁者讚美に使ったこのアララギ派歌人は、金日成の「人間電波」を浴びたいという。まさに、カリスマ的指導者を拜む崇拜者の姿勢である。一方、江間章子の詩は、「金日成首相は地球の上

のともしび」と題されている。その末尾は、次のように結ばれている。

わたしは思う

金日成首相は

地球上の

ともしび

いま地球ぢゅうに光りを投げる

民主主義の偉大な指導者^(註)と

この金日成讚美の詩を書いた江間章子は、「夏がくれば思いたずはるかな尾瀬遠い空」で始まる名曲「夏の思い出」(一九四九年)の作詞者として知られている人物である。一方、真壁仁は、金日成礼讃詩「ベクトウの峰」を、この『万寿無疆』にも掲載している。詩の初出と再録を比べてみると、真壁仁が訪朝の「成果」を作品に取り入れ、推敲を重ねていたことがわかる。雑誌『地下水』掲載の詩は、北朝鮮訪問直前に執筆されたものだが、帰国後に改稿された「ベクトウの峰」には、「ポチョンボ」「玉洞里」「李桂山」といった地名が見られる。「作品」をより良くするために言葉の彫琢に励んだのであろう。

独裁者金日成の還暦祝賀詩歌集『万寿無疆』が発行された一九七二年は、北朝鮮による日本人拉致事件が続々と発生する数年

前にあたる。横田めぐみさんが拉致されたのは、一九七七（昭和五十二年）十一月十五日のことであった。当時の日本には、朝鮮総連系の活動家のみならず、真壁仁のような日本人協力者が多く存在し、北朝鮮による対日世論工作を容易なものにしていた。拉致事件を可能にしてしまう雰囲気は、日本国内に蔓延していた。そのような環境を作った責任の一端は、親北朝鮮派の文化人にもあったと言わざるを得ない。

五、北朝鮮の実情に関する情報

本国の意向を受けた朝鮮総連が、北朝鮮を「地上の楽園」と宣伝し始めたのは、一九五八（昭和三十三年）年のことである。翌一九五九年から一九八四年まで続いた北朝鮮帰国事業における、在日コリアン帰国者獲得のためだった。日本のマスコミもこれに呼応し、一九七〇年代を通じて好意的な報道が多かったという。

しかしながら、菊池嘉晃著『北朝鮮帰国事業』（中公新書、二〇〇九年）によれば、「地上の楽園」北朝鮮の悲惨な現状は、早くも一九六一年には雑誌に伝えられ始めていた。人民を抑圧する独裁国家の現状を伝える本、関貴星『楽園の夢破れて——北朝鮮の真相』（全貌社）が出版されたのは、一九六二年のことである。関貴星は、元の名を呉貴星という朝鮮総連の元幹部で、養子縁組をして日本国籍を取得した。真壁仁の訪朝より十二年早い一九六〇年、訪

問団に加わって自分自身の目で北朝鮮を見ている。この経験に基づいて『楽園の夢破れて』を出版し、独裁国家北朝鮮の欺瞞性を批判した。真壁仁は、北朝鮮の実態を語ったこのような文献に接することも可能な状況にあった。

さらに、真壁仁が金日成首相還暦の祝賀に招待された一九七二（昭和四十七）年には、同じ共産国であるソ連や東欧の実態に即した旅行記が既に書かれるようになっていた。例えば植谷雄高（一九一〇～一九七）の『姿なき司祭——ソ聯東欧紀行』（河出書房新社、一九七〇年）である。共産国に対して最低限の疑問意識を持ていれば、真壁仁がこれらの情報に接することも可能であった。

人間は、自分の世界観に合った情報ばかりを選択し、自らの価値観に反する言論を無意識のうちに遠ざけてしまう。農民に限りない愛着を持っていた真壁仁が、共産国家に関する否定的情報を無視したとしても、決して不思議ではない。驚くべきことに、真壁仁はよど号ハイジャック犯に対する北朝鮮の対応にすら肯定的だった。「チョソンはあるとき飛行機は日本に返し、「招きもしない客」だった学生をあずかった」と好意的に述べている。

六、植民地支配への反省と真壁仁の北朝鮮観

真壁仁の「チョソンの旅」では、日本人の「朝鮮の人々にたいする抜きがたい蔑視の思想」や「侵略」への反省が述べられている。

もちろんこの主張には一理あるが、問題は、このような反省省が、北朝鮮を見る目を完全に曇らせてきたことにある。たとえば、先に言及した日本人記者の訪朝レポート『北朝鮮の記録』（新読書社、一九六〇年）では、偏見への反省省が、そのまま北朝鮮観の歪みにつながってしまっている。

執筆者の一人である共同通信社の村岡博人によれば、この北朝鮮讚美本を批判するような連中は、「植民支配の手段として、支配者から教え込まれてきた」「朝鮮人に対する「ざげすみ」という「偏見や差別感をぬぐいきれない」者たちであるという。「五社七人がそろって朝鮮のことをほめるのはどういわけだ」「御馳走になって洗脳されたんじゃないのか」「もうすこし悪口も書いた方が君のためだぞ」といったような非難は、非難する側の「偏見の裏がえし」なのだという^⑤。この論理によれば、朝鮮への偏見を持たない「正しい」日本人は、北朝鮮を素直に讚美しなければならないのであり、北朝鮮に対する否定的意見は、みな日本人の朝鮮人蔑視に基づくものだということになってしまふ。

植民地支配や、いわゆる「大東亜戦争」を否定的に評価するのは当然だが、それがただちに北朝鮮や韓国やチャイナへの全面肯定にはつながらない道理である。戦後の日本人の多くが、結果としてこれらの国々に対して及び腰になり、言うべきことを言わない誤った遠慮や、悪い面を無意識に看過する結果を生んだこともまた、一面

の真実と言える。この問題は、今日にまでも及んでいる。農民の生活向上に腐心する真壁仁は、社会的弱者に共感的な日本人が陥りがちな先入観にとらわれていた。すなわち、社会主義国に対する幻想であり、憧れである。

北朝鮮を讚美した文学者について考える上で、参考になる文章がある。詩人たちの戦争協力を糾弾した、吉本隆明（一九二四～二〇一一）の「前世代の詩人たち^⑥」である。一九五五（昭和三十）年に発表されたこの文章で、吉本隆明が攻撃の対象としたのは、アナキストの壺井繁治（一八九七～一九七五）や岡本潤（一九〇一～七八）であった。

「大東亜戦争」礼讃の先頭に立ち、敗戦後はそれを深く反省した愛国詩人高村光太郎とは異なり、戦後の壺井繁治や岡本潤は、あたかも第二次世界大戦中に自分たちが反戦を貫き通したかのようふるまった。この矛盾を、吉本隆明が突いたのである。戦争詩を書いたことそのものよりも、二人のアナキスト詩人がその事実には誠実に向き合わず、はっきりしようとした点に批判が向けられている。

吉本隆明の「前世代の詩人たち」は、詩人たちの戦争協力を検証する重要なきっかけになった。その一方で、あまりにも「正義感」に満ちた追及の姿勢に、ある種の限界があったことも事実である。そもそも、吉本隆明が攻撃対象とした壺井繁治や岡本潤は、どう見ても愛国主義者とは言えない。反体制的人物が書いたわずかな数の

戦争協力詩を見つけ出し、鬼の首を取ったかのように騒ぎ立てるのは、問題の本質をはずしているように思われる。大切なのは、なぜこのような筋金入りの反政府的文字者ですら、戦争詩を書くことになったのか。その力学の解明こそが議論の核心であるべきだろう。

もちろん、都合の悪い過去の事実は、葬り去るのではなく、正面から向き合う必要がある。詩人眞壁仁は、ある時代の雰囲気の中で、独裁者金日成を礼讃した。私たちはそのような問題含みの作品にも、しっかりと目を向けてゆかなければならない。なるほど山形の農民詩人眞壁仁が、貧しい百姓への善意に満ちていたことは疑いない。一方で、経済的に恵まれない人々への同情や共感が、共産主義国に対する客観的な判断を妨げたという冷徹たる現実を直視することもまた大切である。「地獄への道は善意で敷き詰められている」という言葉がある。詩人が陥った北朝鮮讚美の実態を見る時、この言葉が新たな意味を帯びてくる。貧困や差別や弱者への過剰な共感、時として誤った判断を生むことがある。眞壁仁の金日成礼讃の詩「ペクトウの峰」は、私たちに多くの教訓を与えてくれる貴重な負の文学遺産と言えるだろう。

七、眞壁仁の言動が問いかけるもの

なぜ、権力のありかたに敏感なはずの左翼的な詩人が、どうしてこうもやすやすと共産国のプロパガンダに取り込まれてしまったの

だろうか。眞壁仁は、戦前特高警察に監視され、一九四〇（昭和十五）年二月には、山形警察署に検挙されている。政治権力に対し警戒心を持たずにはいられなかったはずのこの詩人が、北朝鮮の圧倒的な力を持つ独裁者を前にして、猫のように従順で、疑問の一つすら抱かなかったのはいったいなぜなのだろうか。

共産主義国の政治宣伝を鵜呑みにした知識人について論じる際、正義を振りかざした吉本隆明流の一方的な断罪は、問題の本質をはずしてしまふ危険性がある。道徳的善悪の観点だけでは、また、左右の政治的立場の二項対立のみでは、この問いに適切に答えることは難しい。

戦後日本人のチャイナ観・朝鮮観に、大陸と島国との伝統的な地政学的思考の枠組みが、無意識裡に深くかわわっていった可能性はないだろうか。東アジアの歴史を遙か古代まで遡ら^{さかのぼ}ないと見えてこないものもあるはずである。あるいは、江戸時代の朱子学者的な知のあり方が、何らかの影響を及ぼしていた可能性も考えられる。唐土を聖人君子の国と崇め、非現実的な理想論だけを語り続けることで出世した朱子学者の遺伝子が、「進歩的」文化人にも秘かに引き継がれていたのではあるまいか。これらの様々な政治・文化の力学が多層的に働いた結果の一例として、たとえば眞壁仁の金日成礼讃詩「ペクトウの峰」を位置づけるならば、新鮮な知見や視野が開けてくる可能性がある。この意味でも、戦後の「進歩的」文化人の言動の丁寧な検証が必要なのである。

注

- (1) 佐藤治助・斎藤たち「年譜」、『真壁仁研究』第一号（二〇〇〇年十二月）、三五七—四三二頁。
- (2) 『教科書掲載作品——小・中学校編』（日外アソシエーツ、二〇〇〇年）。
- (3) 真壁仁「峠」、『日本の湿った風土について』（昭森社、一九五八年、四三四—四五頁）。
- (4) 真壁仁「ペクトウの峰」、『地下水』第十四号（一九七二年三月）、三頁。
- (5) 同右、二三頁。
- (6) 真壁仁「チョソンの旅（三）」、『山形新聞』一九七二年五月二十六日。
- (7) 真壁仁「チョソンの旅（二）」、『山形新聞』一九七二年五月二十二日。
- (8) 関貴星「楽園の夢破れて——北朝鮮の真相」（全貌社、一九六二年）、六八頁。
- (9) 寺尾五郎『38度線の北』（新日本出版社、一九五九年）、六八—七一頁。
- (10) 真壁仁「チョソンの旅（一）」、「同（三）」、『山形新聞』一九七二年五月二十二—二十六日。
- (11) 結城哀草果「祝還暦」、『万寿無疆』（朝鮮画報社、一九七二年）、七九—八三頁。
- (12) 江間章子「金日成首相は地球の上のともしび」、『万寿無疆』（朝鮮画報社、一九七二年）、二二九—三〇頁。
- (13) 真壁仁「チョソンの旅（二）」、『山形新聞』一九七二年五月二十二日。
- (14) 同右。
- (15) 村岡博人「近くて遠い国——まえがきにかえて—」、『北朝鮮の記録』（新読書社、一九六〇年）、一一—二二頁。
- (16) 吉本隆明「前世代の詩人たち」、『詩学』第十卷第十三号（一九五五年十一月）、一八一—二六頁。

——にしはら・だいすけ、広島大学大学院教育学研究科教授——